

日出原南遺跡

第 2 次 調 査



1996

久留米市教育委員会

序 文

久留米市は、古くから筑後地方の交通の要所で、経済・文化の中心地として栄えてきました。律令期の奈良・平安時代は合川町に筑後国府、国分町に国分寺がおかれ、近世には久留米城が築かれ、城下町として発展してきました。

ここに報告する日出原南遺跡は、民間の共同アパート建設に伴って事前に実施した発掘調査の記録であります。遺跡が所在する御井町は、高良山の西麓にあり、中世の名残「府中」の地名が示すように、中世街道の宿場町として発展したところであります。当教育委員会では、開発によって消滅する埋蔵文化財に対し、事前の発掘調査を実施して記録保存し、更には、啓発活動にも努めているところです。今回の調査では、街道裏の中世集落の一部と縄文時代の散布地が明らかになり、御井町の地域史の解明に新たな知見を得ることができました。

本書が埋蔵文化財の理解・普及に多少なりとも寄与し、学校教育や生涯教育の教材として、また、学術研究の一資料として、広く利用いただければ幸いに思います。

発掘調査に際しまして、多大のご理解のもとご協力いただいた地権者の■■■■氏に対し、厚くお礼申し上げます。

平成8年9月30日

久留米市教育委員会

教育長 桑 野 善 吾

例 言

1. 本書は、共同アパート建設工事に先立って久留米市教育委員会が受託事業として、平成8年度に発掘調査を実施した、久留米市御井町所在の日出原南遺跡第2次調査の記録である。
2. 発掘調査は、文化部文化財保護課の富永直樹・神保公久が担当した。
3. 本書に掲載した図面の作成・製図、写真撮影は富永・神保と米澤美詠子が行った。遺物の写真は富永・神保が撮影した。調査に関わる遺物・記録類は、久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
4. 本書の遺構実測図に示した方位は、国土調査法第Ⅱ座標系をもとに作成し、すべて座標北を示す。遺構の略表記は、SDー溝、SKー土坑、SPー柱穴・ピット、SXーその他の遺構を示す。
5. 日出原南遺跡第2次調査の遺跡調査番号は、199609である。また、本文中の遺物実測図番号下の（ ）内5桁数字は、本市文化財保護課における遺物登録番号で、遺跡調査番号199609を省略したものである。
6. 本書の執筆は富永・神保が、編集は富永が担当した。

表紙写真：遺跡から高良山を望む（西から）

本文目次

I はじめに	2
II 位置と環境	3
III 調査の記録	5
IV まとめ	13
報告書抄録	13

挿図目次

Fig. 1 表土剥ぎ調査風景（北から）	Fig.12 S D 2 実測図（1/80）
Fig. 2 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図（1/25,000）	Fig.13 S D 2 全景（西から）
Fig. 3 遺跡の周辺地形及び調査地点位置図 （1/2,500）	Fig.14 S D 2 内砥石出土状況
Fig. 4 調査風景	Fig.15 S K 3 全景（北東から）
Fig. 5 第2次調査区全景（南西から）	Fig.16 S K 3 実測図（1/30）
Fig. 6 第2次調査区の遺構配置図（1/150）	Fig.17 S X 5 実測図（1/60）
Fig. 7 北調査区全景（北西から）	Fig.18 S X 5 全景（南西から）
Fig. 8 南調査区全景（北西から）	Fig.19 S X 6 集石検出状況（南から）
Fig. 9 北調査区北壁土層図（1/80）	Fig.20 S X 6 実測図（1/30）
Fig.10 北調査区土層（部分①）	Fig.21 S X 6 完掘全景（南から）
Fig.11 北調査区土層（部分②）	Fig.22 第2次調査の出土遺物実測図（1/3, 1/2）
	Fig.23 第2次調査の出土遺物

I はじめに

1. 調査にいたる経過

久留米市街地東部の御井町は、高良山の西麓を占め、中世から門前宿場町として栄えたところで、高良山関係の遺跡が密集する遺跡包蔵地帯である。平成7年7月24日に至り、■■■■■氏から、久留米市御井町1694、1695番地（開発面積2,033㎡）に係る埋蔵文化財包蔵有無の確認依頼書が提出された。早速、試掘調査を実施したところ、幾つかのピットとそれに伴う遺物が検出されたので、地権者に対し、調査が必要である旨の回答を通知した。当該地は日出原南遺跡の範囲内に所在するものの、これまで発掘調査を実施したのが、南東約130mの第1次調査地点（平成6年度調査）のみであり、遺跡の広がりや性格を把握するための調査の必要性を説き、協議を重ねた。しかし、平成7年度の日程がつかまっており、調査をすぐに行うことが物理的にも不可能であることを理解してもらい、次年度に原因者の費用負担において事前の緊急調査を行うことで協議が整った。

平成8年度に入り、調査日程と費用についての協議を持ち、5月から調査を実施することで合意した。平成8年5月16日、調査の依頼と「法第57条の2」の発掘届が提出された。これを受け、5月24日に『日出原南遺跡埋蔵文化財発掘調査委託契約書』を締結して、「法第98条の2」調査の通知などの諸手続きを終え、5月29日から調査に着手した。申請の建物範囲を対象として、面積550㎡を調査した。検出遺構が予想より少なかったため、遺構は6月上旬に掘り終え、全体の写真を撮影した。中旬に入り、初のトータルステーションによる遺構測量を実施したが、記録的な長雨のため捗らず、7月に漸く本格化し、2台使った測量で、7月9日に測量作業を終え、埋め戻しを11日に完了した。出土遺物の整理作業は、諏訪野町事務所にて実施した。



Fig. 1 表土剥ぎ調査風景（北から）

2. 調査の体制

今回の調査に係る組織体制は、次のとおりである。

調査委託：■■■■■

調査主体：久留米市教育委員会文化財保護課

教育長 桑野 善吾 部長 川原 幸男

調査総括：課長 古賀 幸男 主査 萩原 裕房 埋蔵文化財主査 櫻井 康治

調査庶務：古賀 直喜 試掘調査：古賀 正美

調査担当：富永 直樹・神保 公久 整理担当：米澤美詠子（非常勤）

調査の現地作業と整理作業の従事者は、以下のとおりである。

現地作業：案納アサカ・案納登恵子・案納ミチヨ・加月カツミ・川口フサミ・古賀佐由美・古賀たけ子

古賀ヤエ子・田中 樹子・中村ツヤ子・植原 初美・馬場キヨカ・馬場 富子・平山アヤ子

藤木 幸子・丸山 幸・丸山さち子・山下クニヨ・渡辺しげ子・渡邊やつ子・鹿子島トシエ

整理作業：福田 澄子・森山 明恵・吉田 美穂

なお、調査にあたっては、地権者の■■■■■氏のご理解とご協力を頂いた。記して感謝致します。

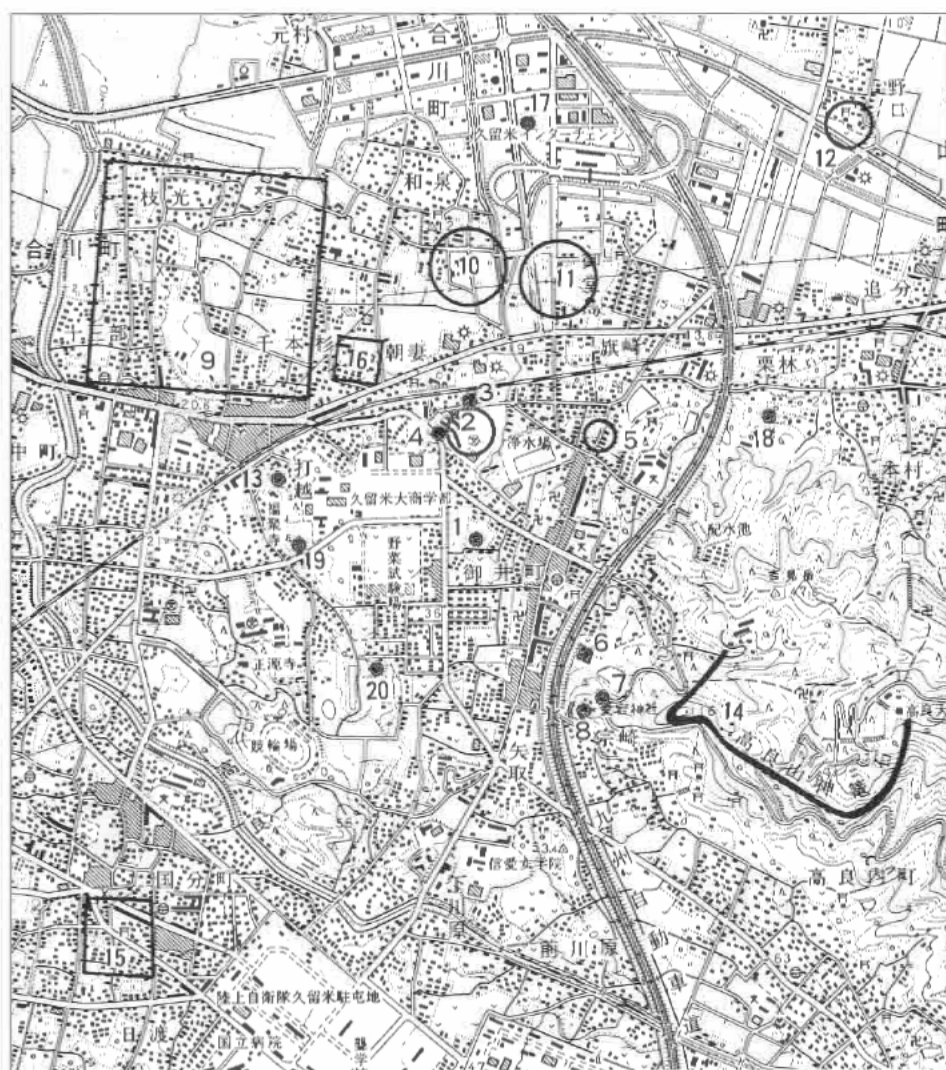
（富永）

Ⅱ 位置と環境

本遺跡は、耳納連山の西端に位置する高良山から北西に派生する中位段丘上、標高31～32mの地点に位置する。遺跡の東方には、徳間清水に源を発する大谷川が北流し、下弓削川に注ぎ筑後川に至っている。この大谷川の兩岸には縄文時代から中・近世に至るまで多くの遺跡が分布し、本遺跡の周辺は人々が各時代を通して連綿と生活し続けた舞台となっている。

遺跡が所在する御井町は、筑後一の宮として古くから人々の信仰を集めている高良大社の門前町、又、交通の要所「府中宿」として栄え、中世以降は「坊ノ津街道」が町の中心を走り、古くから発展した歴史をもつ。このことから本遺跡周辺が人々の生活の舞台であった事が窺え、以下に各時代の代表的な遺跡を概観することにする。

縄文時代の遺跡としては横道遺跡群がある。横道遺跡群は横道、吹上、大鳥井の各遺跡の総称で、中位段丘の北面に位置している。遺物は早期・前期・晩期、遺構は早期の段階のものが認められる。遺物は縄文土器・石器類であり、遺構は早期の竪穴住居・平地住居の柱穴・土坑・集石遺構があり、早期の生活面が検出されている。又、横道遺跡群の北側の低位段丘上にも多くの縄文時代の遺跡が存在し、市内における有数の縄文遺跡の密集地域を形成している。



遺跡名一覧

1. 日出原南遺跡
2. 横道遺跡
3. 吹上遺跡
4. 大鳥井遺跡
5. 二本木遺跡
6. 祇園山古墳
7. 礫山古墳
8. 愛宕山古墳
9. 筑後国府跡
10. ヘボノ木遺跡
11. 神道遺跡
12. 野口遺跡
13. 福聚寺古墳群
14. 高良山神籠石
15. 筑後国分寺跡
16. 朝妻遺跡
17. 下見遺跡
18. 山川前田遺跡
19. 朝妻焼古窯跡
20. 打越古墳群

Fig. 2 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



Fig. 3 遺跡の周辺地形及び調査地点位置図 (1/2,500)

弥生時代の遺跡としては二本木遺跡がある。二本木遺跡では弥生時代中期の土器が大量に出土し、遺構は幅約7m、深さ約1.5mの断面V字の環濠・竪穴住居などが検出され、大規模な集落の存在が想定されている。

古墳時代になると高良山の麓には3世紀末から4世紀初頭に位置付けられている祇園山古墳を始め、多くの古墳が築造される。祇園山古墳は主体部が箱式石棺の方墳で、墳丘裾部周辺からは甕棺墓3基・石蓋土壙墓32基・箱式石棺墓7基・竪穴式石室13基などが検出されている。その他、周辺には岩盤を削り貫き、所謂、磐棺を主体部とした磯山古墳や埴輪を採集したと言われ、前方後円墳と伝えられる愛宕山古墳などの主要な古墳が見られる。

歴史時代に入ると政治的な意味合いが強い遺跡が見られるようになる。奈良時代には四面庇の建物・回廊・倉庫群・掘立柱建物などが検出され、御井郡御跡とされるヘボノ木遺跡や奈良時代全般と平安時代中頃まで連綿と生活が営まれ、集落の形成から隆盛・消滅までの過程が辿れる集落跡である神道遺跡が北側の低位段丘上に見られる。又、平安時代には筑後国府の終焉の地、第四期筑後国府跡とされる横道遺跡が本遺跡の北約300mに位置している。

このように本遺跡周辺は、あるときは生活の舞台として、あるときは政治・経済の要地として長い間人々が生活を営んできた地域であり、本遺跡もその範疇に含まれるものである。(神保)

《参考文献》

『久留米市史』第12巻 考古資料編 1994

「日出原南遺跡」 『平成6年度 久留米市内遺跡群』 久留米市文化財調査報告書第97集 1995

Ⅲ 調 査 の 記 録

1. 調査の概要

今回の第2次調査区は、前回第1次調査地点の北西約130mに位置する。付近一帯は、地山に含まれる礫のため浸透性が高く、大戦前まで水田地には適さなかった処で、専ら、畑地として利用されていた。試掘調査では、ピットが若干検出されており、土師器・輸入陶磁器などの散布が認められることから、集落跡の可能性を想定して調査に着手した。開発内容に合わせ、東西25m×南北11mの長方形調査区を北と南に平行に設定し、重機による表土剥ぎ作業を行なった。約550m²を面調査したが、遺構は全体的に少なかった。遺構検出の地山は、小石を多く含む明茶褐色シルト質土で、その地山面は、北に向かって緩やかな傾斜を見せていた。遺構の掘り下げは、予定より早く仕上げる事ができた。しかし、トータルステーションによる遺構実測段階になると、記録的な梅雨の長雨のため、遅々として測量が進まず、漸く、7月11日に終了した。

2. 検出遺構

調査の結果、鎌倉～室町時代の溝1条、土坑1基、集石遺構1基と明治時代の溝1条、不明遺構1基、ピット群の他、縄文時代の土器・石器などが検出された。

a) 調査区の土層 (Fig. 9～11)

現地表から-30～60cmで地山に達し、北側に向かって緩やかに傾斜する。耕作表土の下は、摩滅した土師器細片を含む茶黒色土で、南方からもたらされた二次堆積を示す。遺構の埋土と同じ第Ⅲ層の黒茶色土にも土師器が



Fig. 4 調査風景



Fig. 5 第2次調査区全景 (南西から)

包含されている。一部分、深掘りをして地山の状況を観察した。IV層の小礫を多く含む明茶褐色シルト質土が平均5cm、V層の黄褐色シルトが15~18cm、VI層の明褐色シルトが10cm以上、それぞれ堆積して地山

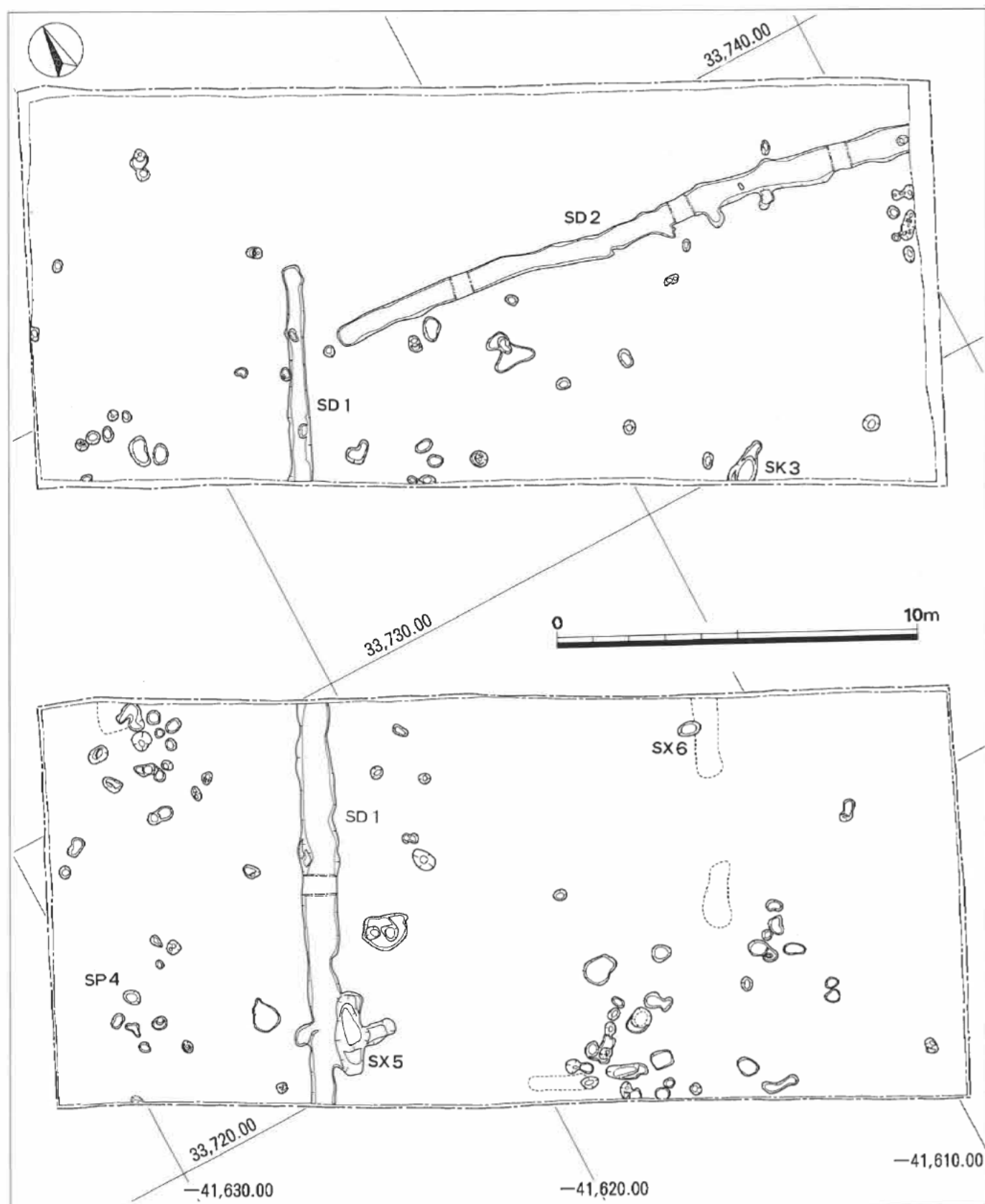


Fig. 6 第2次調査区の遺構配置図 (1/150)



Fig. 7 北調査区全景（北西から）



Fig. 8 南調査区全景（北西から）

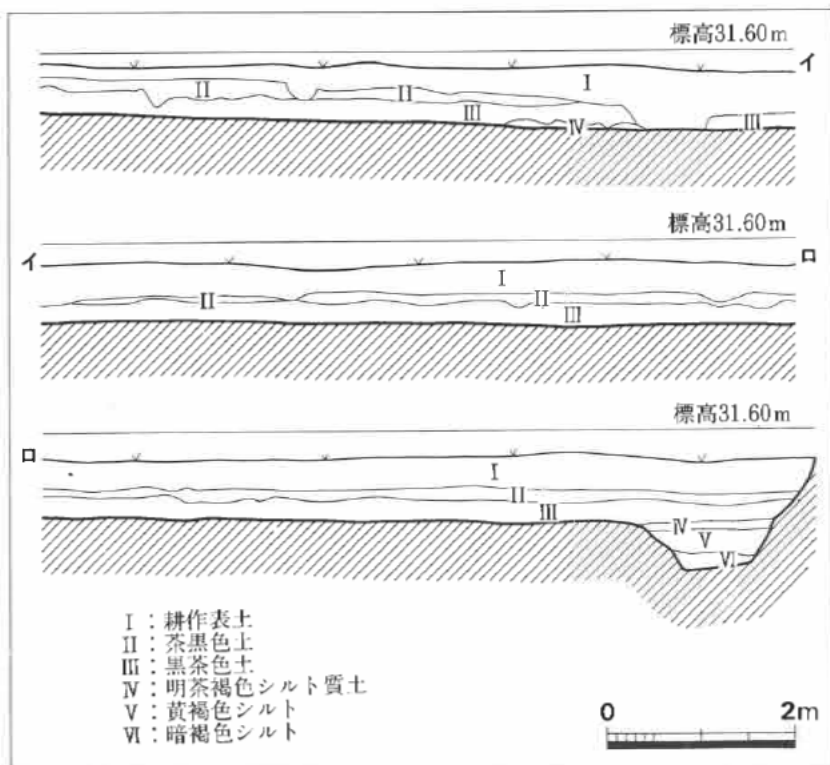


Fig. 9 北調査北壁土層図（1/80）



Fig.10 北調査区土層（部分①）

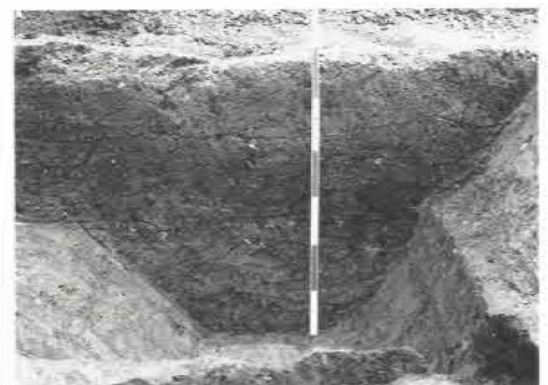


Fig.11 北調査区土層（部分②）

を構成している。V・VI層には余り礫は含まれていない。

b) 溝

SD1 (Fig. 5～8)

調査区の西側にて検出した南北溝で、壁方向と平行に走行する。幅1.1m～0.5m、深さ5～23cmを有する溝で、長さ26mまで検出したが、北調査区の北壁にもその延長が認められ、更に南北に延びる。埋土は耕作表土と同じ茶灰色砂質土で、近代陶磁器を含む。筆境を示す溝である。

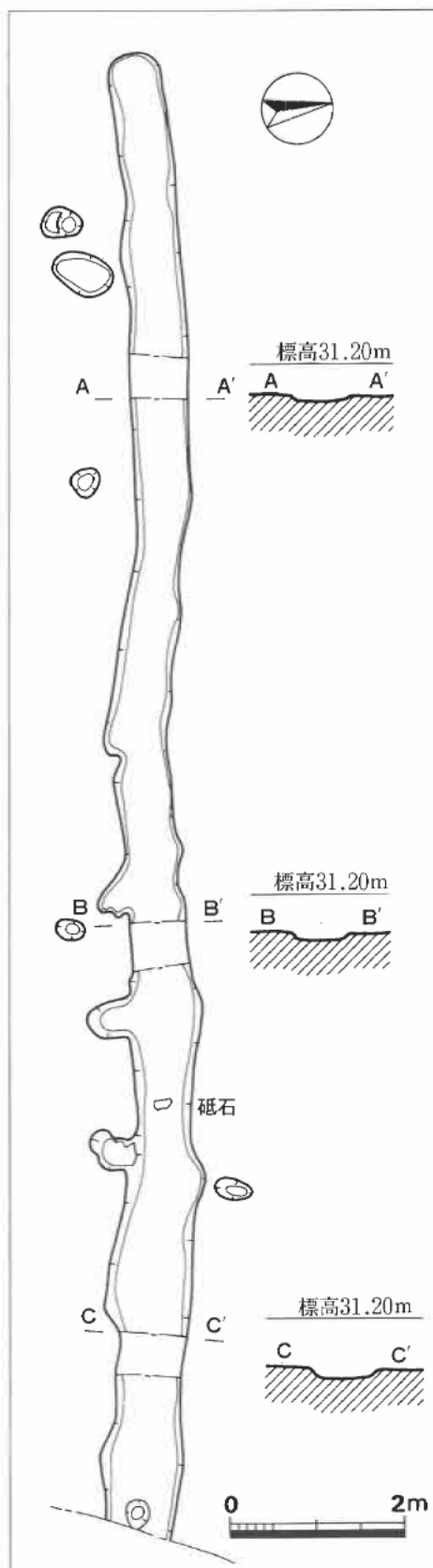


Fig.12 SD 2実測図 (1/80)

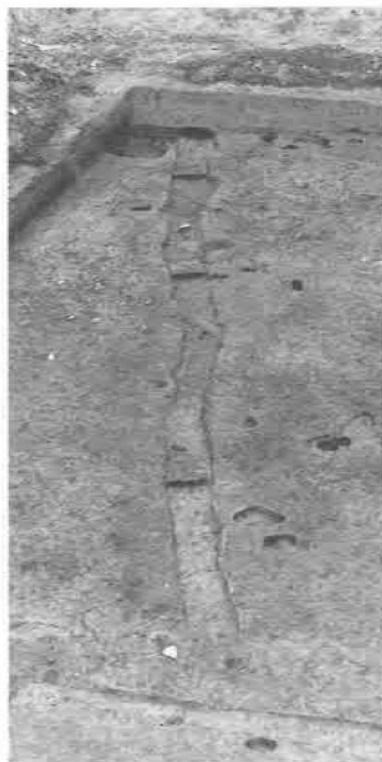


Fig.13 SD 2全景 (西から)



Fig.14 SD 2内砥石出土状況

SD 2 (Fig.12~14)

北調査区にて検出した東西走向の溝で、17m分を確認した。東へ更に延びる。幅0.6~1m、深さ8~15cmで、底面は東に向かって低くなっている。埋土は黒茶色土で、鎌倉期の土師器の

糸切り小皿・砥石が出土している。

c) 土 坑

SK 3 (Fig.15・16)

北調査区の南東壁に接して検出した土坑で、全容が掴めなかったため、規模は不明である。底面は二段で、深さ30cmを有する。埋土は茶褐色シルト質土で、底近くから縄文土器片が出土した。



Fig.15 SK 3全景 (北東から)

b) その他の遺構

S X 5 (Fig.17・18)

南調査区の南端で検出した横T字状の遺構で、溝SD1に連続して認められ、埋土もSD1と同じ灰茶色砂質土である。締まりがなくザラザラし、下層に深くなるに従い、礫を多量に含む。近代以降の鉄釘・銅線、陶磁器、摩滅した土師器片が出土した。電柱を埋設した穴の可能性が高い。

S X 6 (Fig.19~21)

南調査区の北東壁際から見つかった遺構である。長軸64cm×短軸40cm、深さ12cmの楕円形をなす皿状の土坑から、5~13cm大の扁平な片岩礫が30数点検出された。内部から瓦質の火舎片、国産の陶器片が出土した。性格はよく分からない。

ピット群 大小百個余りのピットを検出したが、建物等を構成する柱穴のつながりは認められなかった。(富永)

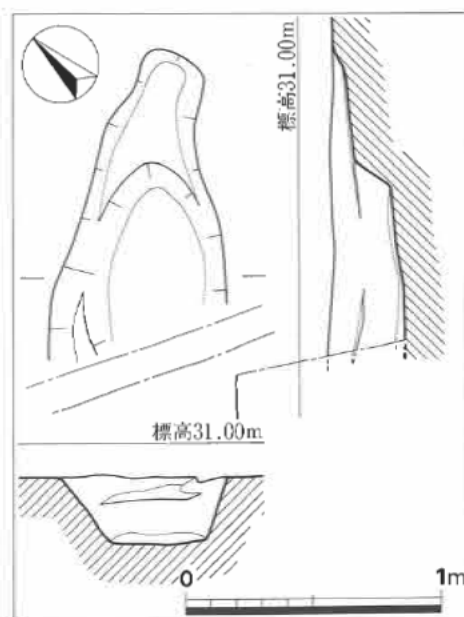


Fig.16 SX3実測図 (1/30)

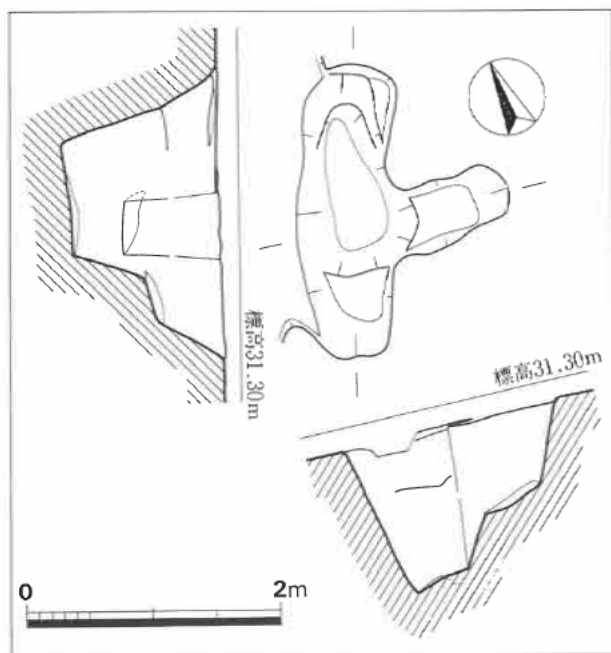


Fig.17 SX5実測図 (1/60)



Fig.18 SX5全景 (南西から)



Fig.19 SX6集石検出状況 (南から)

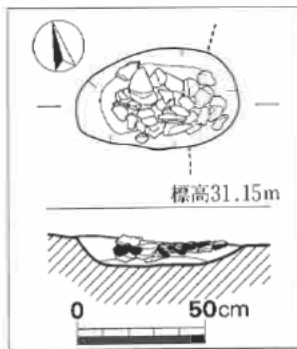


Fig.20 SX6実測図 (1/30)

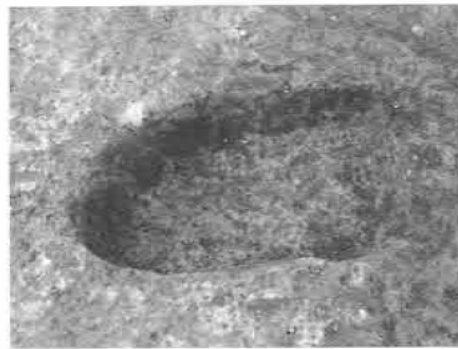


Fig.21 SX6完掘全景 (南から)

3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は少なく、パンコンテナー2箱分であった。以下、遺物の説明を加える。

1は土師器の小皿片資料である。口径・底径はそれぞれ復元で、10cm・7.3cm。器高は1.2cmを測る。調整は全面回転ナデで、底部は糸切り離し。SD2からの出土遺物である。2は明染付の皿の破片である。口径は不明。内面は捻花文、外面は芭蕉葉文が施されている。底は碁笥底で底径は復元で4.1cmを測る。器高は1.3cmが残存している。胎土は精良、淡灰色で、釉はくすんだ透明色である。明染付皿C群Ⅲ類で、16世紀初頭に位置付けられる。SD1からの出土遺物である。3は灰釉陶器の水差しの口縁部で古瀬戸と思われる。口径は復元で8.1cmを測る。胎土は精良で淡灰色。釉は灰色がかったオリーブ色であるが、内・外面共に剥落が激しい。古瀬戸前期様式のもので13世紀後半の所産と考えられる。SX5からの出土遺物である。4は備前の摺鉢片である。節目は7本で、色調は内・外面共に赤みがかった暗褐色。焼成は良好。表土採集資料である。5～7は龍泉窯系青磁碗の破片資料である。5は蓮弁BⅢ類の口縁部の破片である。胎土は精良、極淡灰色で、釉はくすんだ緑灰色である。15世紀中頃の所産と思われる。SD1からの出土遺物である。6は蓮弁BⅠ類の口縁部片である。胎土は精良で淡黄灰色。釉はオリーブ色で、内・外面共に貫入が認められる。14世紀中頃の所産と思われる。表土採集資料である。7は蓮弁BⅣ類の口縁部の破片である。胎土はほぼ精良で極淡灰色である。釉はオリーブ色で、内・外面共に貫入が認められる。16世紀初頭の所産と思われる。SD1からの出土遺物である。8は土師質の土鍋の口縁部片である。胎土には砂粒を若干含む。色調は内・外面共にくすんだ橙褐色で、焼成は良好である。遺構検出面での採集遺物である。9は瓦質土器で火舎の口縁部片である。外面には三角凸帯が二条巡り、間には菱形のスタンプが押されている。内面は斜め方向の刷毛目調整である。SX6からの出土遺物である。10は無文の丸瓦で凹面に布目を施す。外面の調整は叩きの後強くナデている。胎土には少量の微砂粒、石粒を含む。色調は外面が橙灰色で内面が明灰褐色である。焼成は良好。表土採集資料であるがそれほど摩滅はしていない。11は片岩製の砥石でSD2から出土した。砥面として利用されているのは一面のみで、その面の中央には溝を切っており溝の右側がよく擦り減っている。12～15は縄文土器の破片資料であるがいずれも時期・型式等は不明である。12はSK3から出土した。口縁部の破片で器形は不明。胎土は砂粒を多量に含み粗い。外面は横方向に条痕を施し、内面はナデ調整である。色調は外面が黄褐色で内面は暗黄褐色。焼成は良好である。13と15は同一個体と思われるが器形は不明。外面は縦方向に沈線を施し、内面はナデ調整。胎土は石粒を含み粗い。色調は外面が黒褐色で内面は明茶褐色である。焼成は良好。13は遺構検出面での採集、15はSD1からの出土遺物である。14はSK3からの出土遺物で器形は不明。胎土は多量の砂粒を含む。外面は縦方向に条痕を施し、内面はナデ調整。色調は内・外面共に淡褐色。焼成は良好である。16は鉄釘、17は銅線と共にSX5より出土した。18は黒曜石製の剥片鏃で、自然面が残っている。遺構検出で採集した。両側縁は鋸歯状を呈する。19は瑪瑙の石核である。平坦な打面から数回剥離させ、石材が取れなくなった後は、搔器として使用している。SD1から出土した。20はサヌカイト製の搔器である。横長剥片を利用し、刃部を内湾状に加工している。SP4から出土した。(神保)

《 参 考 文 献 》

- 上田秀夫 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』 1982 日本貿易陶磁研究会
小野正敏 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」 〃 〃 〃
『概説 中世の土器・陶磁器』 1995 中世土器研究会編 真陽社

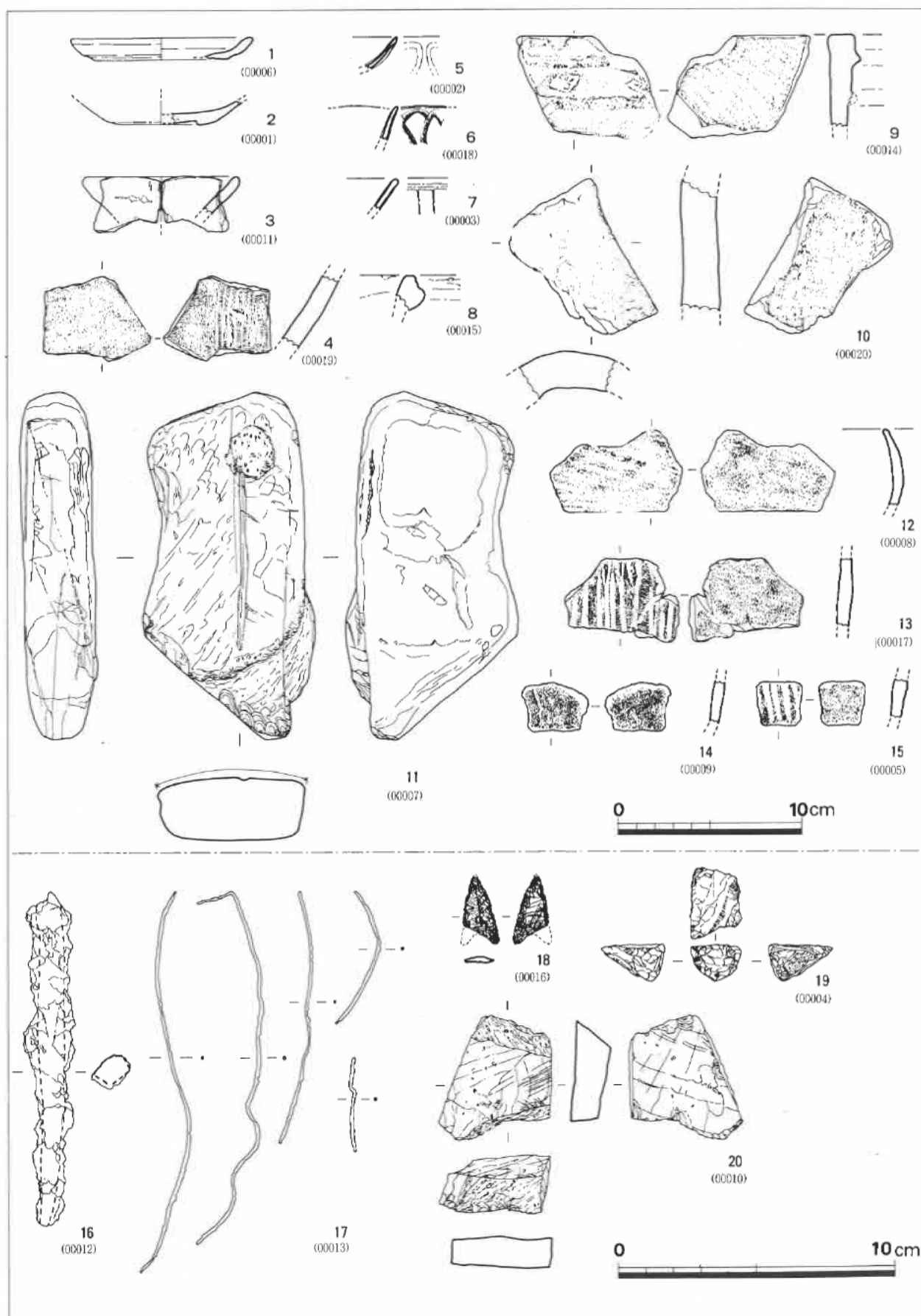


Fig.22 第2次調査の出土遺物実測図 (1/3, 1/2)

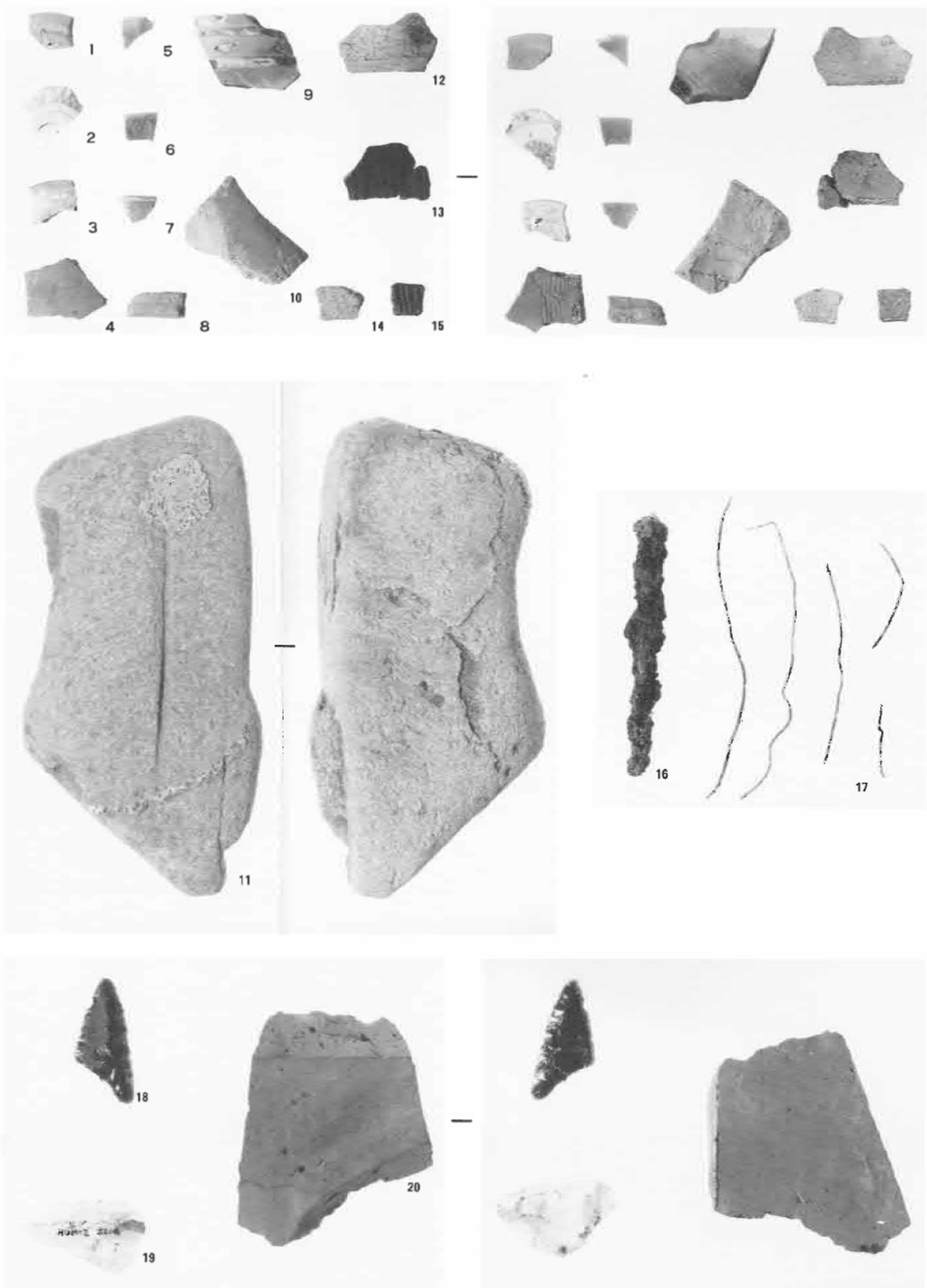


Fig.23 第2次調査の出土遺物

Ⅳ ま と め

今回の調査は、日出原南遺跡の2回目の調査となり、遺跡の広がりや性格を掴むことを目的として実施した。第1次調査地点とは約130m離れており、中世の時期を中心とした遺構・遺物の検出から、同じ時期に痕跡を残した集落遺跡の範囲に包摂されるもので、更に、遺跡は広がるであろう。

検出した遺構は、中世段階の東西溝（SD2）1条、集石遺構1基、ピット群を主体とし、近代以降の溝や電柱を埋設したと推測される遺構などを検出したに留まり、調査面積の割りには遺構密度が甚だ僅少であった。また、殆どの遺構から出土した遺物も少なく、時期幅のある遺物が混在したり、時期が判別でき兼ねる小破片の遺物のみ出土するなど、予想外に遺物の内容が貧弱であった。中世時期の遺物の時期幅は、13世紀後半～16世紀初めまで含み、具体的な年代を特定できる遺構が見受けられなかったのは残念である。

今回の調査で、新知見を加えることができたのは、縄文土器や石器類の発見であろう。土器は数少ないが、縦位の条痕・沈線や横走の条痕に特徴が認められる。しかし、部分的な破片のため全体の器形が不明で、型式名も比定できないものの、胎土や色調・調整から縄文土器として報告しておきたい。本地点の周辺（遺跡の南側一帯）のいずれかに、プライマリーな状態で残存している可能性を期待し、今後、注意を払う必要があろう。

以上のように、今回の調査は日出原南遺跡の一端に触れただけに過ぎず、これから、中世段階の集落の構造や範囲を具体的にしていかなければならないであろう。（富永）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひいでばるみなみ いせき だい 2 じちようき							
書名	日出原南遺跡 第2次調査							
副書名								
巻次								
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第119集							
編著者名	富永直樹・神保公久							
編集機関	久留米市教育委員会							
所在地	〒830 福岡県久留米市城南町15-3 ☎0942-30-9225							
発行年月日	西暦 1996年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査の原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
ひいでばるみなみ 日出原南	福岡県久留米市 御井町字日出原	40203	030287	33度 18分 12秒	130度 33分 11秒	19960529 ～ 19960711	550	共同住宅建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
日出原南	集落	鎌倉～ 室町時代 明治以降	溝……………1条 集石遺構…1基 溝……………1条	土師器・瓦質土器・青磁・ 染付磁器・国産陶器・砥石 近代陶磁器・鉄釘・銅線 縄文土器・石鏃・石核				

日出原南遺跡 第2次調査

久留米市文化財調査報告書 第119集

1996年9月30日

発行：久留米市教育委員会
〒830 久留米市城南町15-3
編集：文化部文化財保護課
☎0942-30-9225
印刷：香和印刷株式会社
〒830 久留米市津福本町2320-15
